

ひげ男（幸田露伴）

天正三年五月、武田信玄の世嗣勝頼率ゐる甲州軍が織田徳川聯合軍に惨敗を喫した長篠の合戦の前夜、亡き信玄の信頼した山縣昌景、馬場美濃守、内藤修理等の勇將達は味方の成算乏しきを知り負け戦必至と見て、出撃を思ひ止まる様勝頼を諫めるが、勝氣に過ぎて退く事を知らぬ勝頼は聞き入れず、有無を云はせず出陣を命じる。

「此上このうえはとて心を死に決せし」山縣等は「時に臨みて驅引かけひきに不覺ふかくの名をば残すまじ」とて明日の戦場一帯を巡察し、清井田河原に至つて休息、水盃を酌み交はしつゝ、「あら心地よや、胸すゞしや」とて死出の覺悟を語り合つてゐると、突如、「わあつとばかりに」泣く聲がする。誰かと思れば、「黒漆の如き髭髯ひげお生ひたる」笠井大六なる武士である。泣いた理由を問はれて彼は云ふ。僭越せんえつながら、「死をのみ望まるゝ」各々おのおのの御意見は「大六つやつや合點がてんまるらず」、何故となれば、今、この時こそが弓矢取る身の「踏み堪へねばならぬ瀬」ではござらぬか、

「生きてはもとより君のため、死して厲鬼おにとなつてまでも君の御爲おんために狂はんこそ一旦男兒をとこが主従の契ちぎりを爲せし上は本意ほんいなれ、さるを精忠無二の各位おのおのいちご一圖に此世を捨て玉はんとは、是非なき義とは申しながら口惜くちをしくも思ひ限り玉ひしよ」、「生きらるゝだけは生延びて御屋形のため世にあるべし」と思ひ返す御仁は一人も無きか。

諸將は黙つて聽いてゐたが、馬場美濃守が大六の身を掻き抱いてかう語る。「嬉しくも武田の御家に和殿わどのの如きが猶ありしよ」、その言分も「誰あらずか否と申すべき」、さりながら、我等は「老いたり、死すべき時來れり」、「死するよりほか忠節の致し方はや既無き身となりたる我等が心の中推量あれ」、「我等は死して後我等を憐れと我が君の思おぼさば非を改め玉はんかとの、果敢はかなき頼みのみを胸にして死せんと決するに至りし悲しさよ」、さう云つて大六を見下ろす馬場の眼から「はらりと露の幾いくしゆく雫」が大六の面に落ちた。

翌日の合戦で、山縣馬場内藤を始め武田方の名だたる武將が數多く戦死するが、勝頼は辛うじて逃げ延びる。大六は織田方に紛れ込み、信長の命を狙ひ、斬りつけるが、仕損じて捕へられる。家康は見所ある武士と見て、激怒する信長に乞うて大六の身柄を預り、徳川に仕へよと誘ひをかけるが、大六はうべなはず、やがて勝頼が再び旗を擧げたと知るや、閉込められてゐる

た寺を脱出、「我が力量の及ぶ分の中に於て君の爲に盡さん」とて、勝頼の許に馳せ参じるのであつた。

露伴二十九歳の作である。「忠節の致し方」を繞つて葛藤するのは武田方の武士に限らない。徳川方にも「生かば生くべきを死しての忠孝、生きんに生き辛きを生きての忠孝、いづれか眞實の大丈夫たらんと冀ふもの取るべき路」かを繞つて譲らぬ武士達が登場するが、何れにせよ、彼等は「力量の及ぶ分の中に於て君の爲に盡」す事にこそ生甲斐を見出すのであり、死に損ひ、生き損ひだけはすまいと必死になる彼等の姿は感動的である。露伴がやはり「眞實の大丈夫たらんと冀ふ」武士を描いた「奇男兒」について、「情熱家でなければ書けない」と谷崎潤一郎は評したが、「ひげ男」についても全く同じ事が云へる。

この作品は明治二十九年、日清戦役直後に發表され、國を擧げての大戦争を経験した許りの國民に好評を博したといふ。固より當時は忠節も忠孝も未だ死語ではなかつたし、今と異り平和も自由も平等も自明の價値ではなかつた。さういふ自國の過去と絶縁して今の日本がある。露伴を讀むといふ事は、我々が如何に貴いものを擲つて來たかを痛感する事でもある。

(露伴全集、第五卷、岩波書店)